

2018 INTERNATIONAL CONFERENCE ON ENGLISH TEACHING AND
LEARNING での口頭発表

2018年5月18日から19日に台湾の新竹市で開催された2018 International Conference on English Teaching and Learningにて、「Why do Japanese learners of English use be-verbs unnecessarily and produce ungrammatical English sentences?」というタイトルで口頭発表を行いました。この学会は、英語教育に関する国際学会であり、学会には台湾内外の英語教員に加え、世界各国から英語教育の研究者が参加していました。

私の研究は、日本人英語学習者の be 動詞の誤りであり、一般動詞が必要な個所で be 動詞が現れる過剰般化という誤り（例：I am a muscular pain.）と、be 動詞が必要のない箇所で be 動詞が現れる過剰使用という誤り（例：This bag was my father bought for me.）について調査したものです。実験に先立ち、これらの誤りには日本語の助詞「は」が影響を与えているという仮説を立てました。そして、70人の日本人大学生を対象に文法性判断テストを行い、日本人英語学習者が be 動詞の過剰般化と過剰使用の誤りについてどのように判断するのか検証しました。実験の結果、上記の仮説は支持されず、「は」だけが be 動詞の誤った使用に影響を与えているとは言えないことが分かりました。さらに、日本人英語学習者にとっては過剰一般の誤りが特に難しく、その要因として、文の主語と主題の区別が困難であることが影響していると議論しました。このような be 動詞に関する誤りは、日本人大学生だけではなく、英語を学び始めた中学生や高校生にも見られるものであり、日本の英語教育では、どのように be 動詞を指導すればその誤りを減らすことができるのか、今後検討していかなければならないと考えています。

この学会に向けて、私は指導教員とともに何度も発表原稿やスライドを推敲しただけではなく、英語のネイティブ教員の助けを借り、英語での発表練習も行いました。学会発表は私にとって初めての試みであり、さらに国際学会における英語での発表ということで、緊張と不安がありました。準備に多くの時間を割いたおかげで自分の研究を自分の言葉で発信することができ、非常に良い経験になりました。また、学会では、世界中の研究者が自らの研究を発表しており、その中に散見される様々な国の事情を踏まえた英語教育に対する研究の方向性や、日本の英語教育とは異なった考え方に触れることもできました。この学会を通して得られた貴重な経験をこれからの研究に生かし、自分の研究をさらにより良いものにしていきたいです。

国際関係学研究科 比較文化専攻
修士課程 2年
伊藤 友衣子

